第３回 住民がつくるおしゃれなまち研究会 議事概要

日　時：2018 年 1 月 22 日（月）15:00～17:00
場　所：戸田市役所５階　501 会議室
出席者：【委　員】卯月盛夫 座長（早稲田大学）、岡田智秀 委員（日本大学）、福井恒明 委員（法政大学）、梶山浩 委員（戸田市）、石川義憲 委員（日本都市センター）
【戸田市】関係課所属長、戸田市 PT
【事務局】川上担当課長、長谷川副主幹（戸田市）
池田副室長、髙野研究員、瀧澤研究員、千葉研究員、内藤研究員補（日本都市センター）

議事要旨
・岡田委員による問題提起
・調査研究に関する議論

１　岡田委員による問題提起

（１）はじめに（論点整理）

・過去２回の研究会と戸田市内の現地視察を踏まえて、戸田市のまちづくりビジョンをつくっていければと考えている。
・まちづくりのビジョンは、大きく３つの選択肢がある。住み続けたくなるまち（定住人口の維持）、訪れたくなるまち（交流人口の増加）、移住したくなるまち（流入人口の増加）である。
・戸田市は、市内にある倉庫の稼働率が高い。流入人口の増加を期待するより、定住人口の維持や交流人口の増加をめざしていくことが一つのビジョンとして考えられる。
・戸田市民が住み続けたくなるために、戸田市の中で過ごせる豊かなライフスタイルをデザインしていく。そのために、戸田市におけるおしゃれの具体的要素を明らかにしつつ、戸田市流おしゃれを考えていく。
・おしゃれの具体的要素は、戸田市内に賦存する地域資源を生かすことで見つけていくべきではないか。また、地域資源を見つけて終わりではなく、その資源が魅力的に感じられる場所づくりをあわせて実施する。
・漕艇場は戸田市ならではの風景であり、彩湖・道満グリーンパークはいろいろな水辺のレクリエーションが行われているが、その姿を客観的に飲食でも楽しみながら眺めるスポットが不足しているのは問題である。
・主体が楽しむだけでなく、客体（第三者）がそういう状況を見てあこがれたり、楽しいなと思ったり、ひいては参加したいなと感じることが重要である。見る・見られるという関係こそが景観ではないか。

（２）戸田市の水辺空間

・戸田漕艇場は、学生や実業団が連日使用しており、日中の一般開放は難しい。そのため、夜間の一般開放の可能性はあるのか。また、そもそも市民からのニーズはあるのか。

・夜間の漕艇場に立ち入りができない場合でも、水面をライトアップするだけで雰囲気が変わる。水面を借景として演出していくことも可能である。
・日中の漕艇場は、イベントやレースのときに大勢の人が集まる。戸田公園の五輪聖火台の横にカフェを設置するなど休憩できるスポットを提供すれば、集客の場になるだろう。
・戸田市の参考となる水辺空間として、富山市の富岩運河環水公園が挙げられる。そこに立地しているスターバックスは、世界一美しいということで有名である。戸田市に当てはめると、漕艇場にカフェを設置することで、カフェからボートを見て楽しんでいる人たちはもちろんのこと、こういった仕掛けがおしゃれにつながっていくものと思われる。
・漕艇場にデッキテラスを設けると花火を鑑賞する一等地にもなるだろう。水面側を見ればボートの風景で夕焼けが眺めることができ、夜は花火を堪能できる。そういったポテンシャルのある土地なのではないか。
・彩湖・道満グリーンパークは、セーリングや SUP（スタンドアップパドルボード）等のさまざまなウォータースポーツが展開されている。ただし、こちらもアクティビティーの主体だけが楽しんでいる現状になってしまっている。やはり、参加している風景を愛でる場所がないのが問題として挙げられるのではないか。
・笹目川でも SUP は実施できるだろう。その場合も、鑑賞する場所を確保しないと戸田市のイメージとしては定着しないものと思われる。

（3）水辺カフェの立地パターン

・標準タイプは、富岩運河環水公園のスターバックスに挙げられるように、常設のカフェである。また、台東区の隅田公園は、協議会形式によって公園内での営利活動のできる施設の建設が認められるなど、公園の利用規制も緩和されてきている。
・仮設タイプは、広島市の京橋川が有名である。仮設のメリットはいつでも撤退できることである。京橋川も仮設での試みを開始したところ、少しずつ規模を拡大し、現在は観光スポットになるまでに発展している。
・デッキタイプは、護岸のしつらえ方で形成が可能になる。彩湖は芝生が広がっているが、腰を落ちつける場所を特定しにくい。そのため、デッキ的なものを配置するだけで、腰をおろしたり寝そべって日光浴をしたりと利用を絞ることができる。
・川床タイプは、京都市の鴨川に代表されるように、水陸の両方が味わえる曖昧な仕掛けが特徴的である。また、高低差によって水面の表情がいろいろ楽しめるのも魅力である。水面というのは、視点が低いと水面に意識が向き、高いところに行けば行くほど水面越しの対岸に意識が向く。そのため、高低差を設けるとさまざまな見せ方、仕掛け方ができる。
・ピアタイプは、高低差がつけられないような場所において、水面に張り出すという方法である。飯田橋のカナルカフェは、杭式で水面の上にデッキを張りめぐって親水性を高めている。水面と非常に一体感が出てくるため、周辺から見ても親水性が感じられる。
・水辺において重要なことは、法律にないものはつくらないではなく、法律にないものをどうすればつくれるかを考えることである。そしてそれを働きかけることが行政としてのチャレンジでもある。

（4）既存ストックの活用（倉庫・三軒協定）

・戸田市には倉庫がひしめいているが、それらをいきなり土地利用転換はできないため、逆手にとって一つのイメージにしてはどうか。倉庫を潰して新しいおしゃれなものを誘致するのではなく、倉庫でおしゃれにできないかという問題提起である。

・倉庫のリノベーションの事例では、墨田区の本所でカフェ、ギャラリー、ミュージアム、レンタルスタジオ、アートダンス会場、劇場などにコンバージョンしている。倉庫は天井の高さと柱がない壁構造、採光が奥まで届くといった特徴があり、自由な使い方ができる。

・尾道市の ONOMICHI U2 は、サイクリングとリノベーションをセットにした倉庫の活用事例である。尾道の海辺を堪能できる自転車のまちづくりを展開しており、倉庫の高さを生かして 2 階建ての宿泊施設にし、自転車を自分の部屋に入れることができる。さらに、宿泊施設の一画では自転車のメンテナンスやパーツ販売も行っているなど、参考となる事例である。

・戸田市は、三軒協定発祥の地として全国的に注目された地域であるため、イルミネーションでの三軒協定を推進するのもいいのではないか。住宅地に光があると犯罪防止にもなり、LED ライトなら生け垣より維持管理費が掛からないという利点もある。

（5）問題提起（まちをつくる主体としての住民）

・研究会名が「住民がつくる」であるが、おしゃれなまちをつくる主体としての住民が見えてこない。その発掘方法を議論する必要がある。

・都会でもなく田舎でもない首都圏近郊は、都会のアクティビティーも見込めず、地域資源も少ない。そういった地域を元気づけるのは難しい。

・首都圏近郊都市である八千代市は、住み続けたくなるまち（定住人口の維持）をコンセプトに八千代台まちづくりプロジェクトという取組みを展開している。

・20 代の子ども世代は、都会の大学を経験して都会の魅力に引っ張られて、なかなかふるさとに帰らないことも多い。30、40 代の子育て世代は、子どもが手を離れるとそれまで狭く感じていた家を持て余すようになり、新たな家を求めて転出することがある。60 代以上の世代は、世代交流や地域活動に参加しにくい状況があるなど、それぞれ世代別の懸念がある。八千代台もそういった閉塞的な側面を持っていた。

・八千代台まちづくりプロジェクトでは、結論が出るまで徹底的に議論することをめざし、全 9 回、参加者は 260 名にも及ぶワークショップを実施した。ワークショップは、八千代台を 4 地区に分け、地区ごとに議論を開始した。また、学生がファシリテーターを務めることで、市民も肩肘張らずに議論を行うことができた。

・八千代台の魅力を再確認するために、それぞれの地区をまち歩きした。さらに、相手方の地区の人に自分の地区を歩いてもらい、案内する相互まち訪問を実施した。そこでは地元自慢をするために、真剣な議論を重ね「まち歩きルート」を設定した。

・相互まち訪問を実施した結果、いくら施設を作ってもまちそのものに魅力がなければ人は来てくれないことや、まちに住み続けてくためには日ごろの生きがい・やりがいを自らがつくっていくことが大事であるとの認識に至った。そして、自分たちが楽しむためにはどうしたらいいかに議論が移っていった。

・今までの意見を地区別にまとめ、4 地区共通の意見やメリットなどの論点を整理して「まちづくり台帳」を作成した。毎年更新し、今後まちの開発などがあったときに、守るべきものや改善させるべきものをいつでも確認できるようにしているほか、達成状況が分かるよう進行管理も行えるようになっている。
・ワークショップを振り返ると、住民の行政への陳情から、自らできる部分に目を向けることで何かしら改善できないかを探すきっかけをつくれたのではないか。

（6）まとめ

・戸田市流おしゃれの具体的要素を何とするか。少し的を絞る必要がある。
・戸田のイメージ形成を促す空間づくり。つまりおしゃれを形づくる具体的要素を楽しみながら鑑賞できるスポット、そういった拠点をつくっていくことが大事である。
・施設の誘致やアクティブな行動が展開されたときに、それをイメージ形成のために働きかける住民の発掘・育成をどうしていくかが大きな論点となる。

2　調査研究に関する議論

・主体の話が一番共感した。きっと戸田市内にキーマンがいて、その人たちがおしゃれだから従っていこうという流れもあるはず。そういった新たな人材、核となる方を探していきたい。
・サイクリングやレジャーだけでなく、生活手段・交通手段としての自転車も重要である。それぞれの接点を見つけ展開していけないか。
・ママチャリは相当なライフスタイルである。子育て中の母親は、アシスト付きの自転車に乗っていることも多く、相当おしゃれの要素がある。カフェやサイクリングロードなど絵になる風景をママチャリで走るのが格好いいなど、買い物以外に行く目的をつくれたら戸田らしくなるのではないか。
・漕艇場やサイクリングに焦点を当てると、駅へのアクセスの改善も課題であるが、まずは地元の住民が楽しみ活動が盛り上がることが重要である。
・市民あるいは市民団体と行政がダイレクトに連携するのは難しい。中間支援組織があって、そこにある程度の予算が使われることで初めて成功するのではないか。
・住民と行政がひとつのテーブルに着くと、住民の行政への陳情という空気になってしまう傾向がある。第三者的な中間支援組織が行政を見守っていくアプローチが鍵となってくる。

3　今後の予定

・第 4 回研究会は、2018 年 2 月 28 日に開催予定である。福井委員に問題提起をしていただき、意見交換を行う。
・第 4 回研究会までに、大阪市、広島市への現地調査を実施する。調査内容は研究会にて報告するとともに、2019 年 3 月刊行予定の報告書へも掲載を予定している。
・第 4 回研究会までに、戸田市民向けアンケートは回収が終了する。第 4 回研究会にて中間報告をし、第 5 回研究会では詳細な分析結果を報告する。

（文責：日本都市センター）